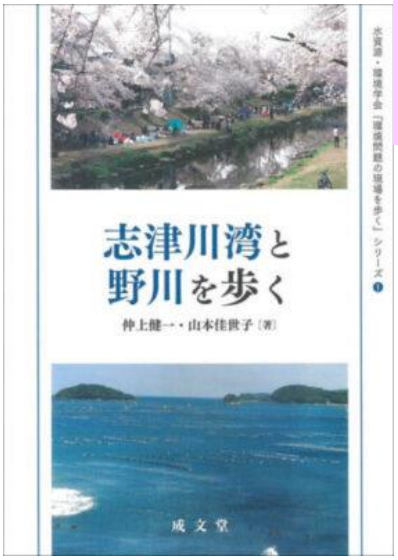


ブックレット①「志津川湾と野川を歩く」

1,000円(+税)

ISBN:978-4-7923-3430-7

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

東日本大震災・プロジェクトX「奇跡の志津川湾」

著者：仲上健一（立命館大学OIC総合研究機構サステイナビリティ学研究センター上席研究員）

2017年1月20日、立命館大学で行われたシンポジウム「漁業者が語る里海の今」で、宮城県漁業協同組合志津川支所の運営委員長（当時）佐々木憲雄氏は力強く語った。「後継者が3分の1、半分になったとき、どうなんですかって話をよく聞かれるんですが、全然心配ないとは言わないんですけど、私はあんまりそんなに深刻に考えることじゃないぞ、つまり一人一人の水揚げが増えるし、そういった中では海を守るっていう、本気になって街を好きだっていう人間が多いんでそういった意味で、非常に、その辺はそんなに心配しなくて大丈夫だよなというふうには思っております。」

南三陸町は、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波の教訓を踏まえ、防災に強いまちづくりが町民一丸になって進められ、2006年12月には「南三陸町地域防災計画」が策定され、万全な防災計画と防災意識の高い南三陸町であったが、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震により壊滅的な被害を受けた。そして、今、再び復活しようとしている。

2016年3月には、「南三陸町第2次総合計画 2016～2025」が策定され、町の将来像として、「森里海 ひと いのちめぐるまち 南三陸」が掲げられた。

宮城県南三陸町にある志津川湾は、「きれいで・豊かで・賑わいのある」という３要素が揃った日本を代表する里海である。志津川湾では、東日本大震災を契機として、様々な新しい試みが行われた。環境に大きな負担をかけず、地域社会にも配慮した養殖業を認証する世界的団体である水産養殖管理協議会(ASC)に、2016年5月に志津川湾戸倉地区の牡蠣養殖(南三陸戸倉っこかき)が認証された。2018年10月18日に南三陸町志津川湾がラムサール条約湿地に登録された。東北地方では初の海域の条約湿地であり、海藻の森＝藻場の貴重さが認められての登録は国内初である。

2017年3月3日には、「南三陸さんさん商店街」本設商店街がオープンし、全国からの多くの観光客で賑わっている。2022年10月1日には、南三陸町の震災伝承館「南三陸311メモリアル」がオープンし、東日本大震災の教訓を学ぶことができる。

志津川湾の里海としての復活が、南三陸町そして東北地方の新しい希望の光になることを祈念して執筆した。仙台から高速バスで、1時間44分で、商店街へ到着。是非、本書を携えて、志津川湾を訪れ、海と人に触れてほしい。

野川を歩いて自然と人々との関わり合いを考えよう

著者：山本佳世子（電気通信大学大学院情報理工学研究科・国際社会実装センター教授）

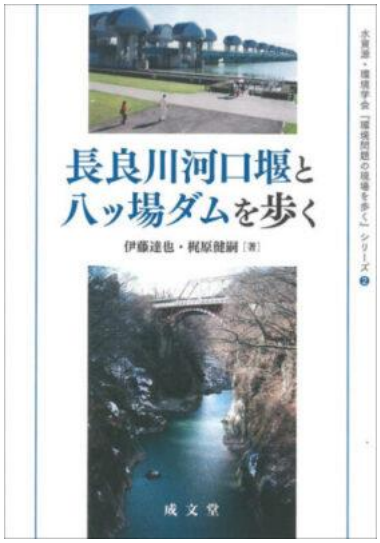
多摩川と聞くと、多くの皆さんが名前を聞いたことがあるのではないでしょうか。本書で紹介した野川は、延長20.2km、流域面積69.6㎢の小規模な多摩川の支流で、国分寺崖線（はけ）に沿って、随所で湧水を集めながら、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市、世田谷区を流れ、二子玉川で多摩川に合流しています。また、古多摩川の名残川と考えられています。

野川には見所は複数あり、鉄道やバスなどの公共交通機関を用いて行くことができます。野川流域の自治体が野川マップをそれぞれ発行し、インターネット上で公開していますので、土地勘のない人でも見所をすぐに確認することができます。また、いつの季節でも、野川の両岸に沿った緑道で、ウォーキングやジョギングをする人をよく見かけます。

一方、野川は川幅が小さく、水深が浅い河川であるため、集中的な降雨により河川水位が急激に上昇することがあります。そのため、野川流域では、梅雨、台風、雷雨、集中豪雨の時に洪水がしばしば発生し、河川改修や調節池の整備などによる河川整備が行われています。

このように、野川は、平常時は地域住民にとても親しまれていていますが、洪水発生時には地域住民にとって脅威になることがあります。また、平常時には、野川に親しむことで、自然の豊かさ、自然の恵みを楽しむとともに、災害時の状況を想像して身近なリスクについて考えることは、個人による自助の災害対策として有益であると考えられます。

本書を携えて野川を歩くことで、身近な河川から自然と人々との関わり合いについてぜひ考えていただきたいと思います。



ブックレット②「長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く」

1,000円（+税）

ISBN:978-4-7923-3431-4

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

長良川河口堰問題を知ろう

著者：伊藤達也（法政大学文学部教授）

1995年に長良川河口堰が運用を始めてから、およそ30年が経過します。長良川河口堰を建設するにあたり、わが国を覆いつくす程の巨大な反対運動が発生したことを知る人はもはやほとんどいないのかもしれないです。でもわが国の環境問題を考える際、長良川河口堰問題が今現在も最も注目すべき問題の１つであることは間違いないと思います。

20世紀末、わが国を二分するほどの環境問題となった長良川河口堰問題は、それまでのダム・河口堰問題とその特徴、性質、規模などにおいて、全く異なるものでした。当時、私は大学院生として、また大学教員として問題に関わり、問題点の指摘に全力を注いでいました。長良川河口堰は何が問題であったのか。今に伝わる政府の失敗が本書には書かれています。

長良川河口堰問題のユニークさの１つは、反対運動の中心を担ったのが釣り人やアウトドア愛好者たちで、運動が明るく楽しく、まさに21世紀につながる環境保護運動の特徴を示していたことです。そしてもう１つの特徴は、河口堰完成から約30年が経過した現在でも、堰の開門、さらには堰の撤去までをも見通した運動が継続していることです。しかも愛知県が委員会を立ち上げて堰の開門を目指しています。他の問題に見られがちである、事業の完成と同時に人々の関心が失われ、反対運動が消滅してしまうようなことはなく、今もしつこく運動は続き、河口堰による環境影響の縮小を目指しているのです。

環境問題はダムや河口堰ができてからより本格化することを考えれば、長良川河口堰反対運動こそあるべき環境問題への対処法と言えるのではないでしょうか。なぜ、長良川河口堰ではこのように関心を持ち続けることができているのか。そしてどのような問題を抱えているのか。本書が説明します。本書を読み、長良川河口堰問題の現場に出かけてみませんか。河口堰への行き方も本書に書いてあります。

東の八ッ場、西の〇〇

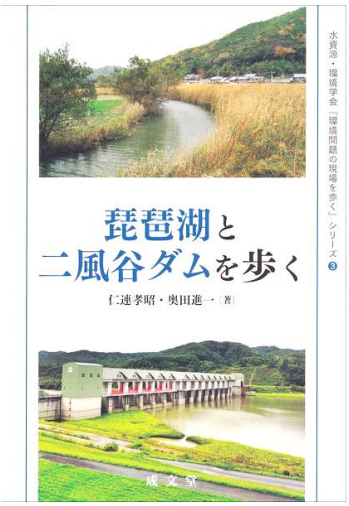
著者：梶原健嗣（愛国学園大学人間文化学部教授）

私が八ッ場ダム建設予定地にはじめて訪れたのは20年前でした。当時はまだダム本体工事が始まっておらず，昭和の風情を残す川原湯温泉街に降り立ち，「ようこそ，ダムに沈む温泉へ」という看板に出迎えられました。ダム計画が進行中のため，公共投資も，また温泉街の旅館レベルの建て替え等が進まず，かえって昔ながらのよき風情が封印された温泉街がそこにはありました。

当時は，まだ「八ッ場」という名前は一般に広まっていませんでした。携帯やＰＣを購入した際には，最初の単語登録として，「八ッ場」を覚えさせたことを記憶しています。しかし，いまではそんな手間はありません。2009年の政権交代に際し，「コンクリートから人へ」というスローガンの象徴となったこともあって，八ッ場の名前は広く社会に浸透しました。とはいえ，かなり政局的な色彩を帯びて報道が始まったこともあって，多くの誤解も広まりました。

八ッ場ダムは，戦後日本のダム問題を振り返った時，これなしではその歴史は語れないというダム問題の１つです。八ッ場ダムは，戦後直後の大型台風（カスリーン台風）に端を発し，時代ごとにその位置づけを変えながら，2020年に運用を開始しました。構想表明から実に70年余りを経て完成，最終的には，5,320億円という，日本一高額なダム事業になりました。長期化したダム構想，問題山積みのダム計画を指して，時にメディアは「東の〇〇，西の〇〇」と形容しましたが，東はいつも八ッ場ダムでした（西は，苫田ダムだったり，徳山ダムだったり，大滝ダムだったり，川辺川ダムだったりしました）。

そんな八ッ場ダムは，私にとっての研究の原点です。このブックレットでは，いまはもう見ることができない旧温泉街などを，写真なども交え紹介しました。70年弱の歴史を踏まえながら，現地を訪れるお供（ガイドブック）にしていただければと思います。



ブックレット③「琵琶湖と二風谷ダムを歩く」

1,000円（+税）

ISBN:978-4-7923-3440-6

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

琵琶湖を歩き、人と自然の共生をもう一度見直してみよう

著者：仁連孝昭（関西文理総合学園長浜バイオ大学理事長、成安造形大学客員教授）

琵琶湖は山岳地形の発達した日本列島の中では珍しく広大な面積を持つ日本一の湖である。それゆえ、琵琶湖の名前を知らない日本人はほとんどいない。そしてその位置も誰もが知っている。でもそれ以上のことをご存じの人は残念ながら少ないのではないだろうか。

ここで紹介したのは人との深いかかわりを持っている琵琶湖である。琵琶湖を取り巻く山々から眺めた湖面は素晴らしいが、山岳地域に存在する湖のような景勝地ではない。また人の手の入らない自然が残されている場所ではない。琵琶湖はそこに人々が暮らし始めた頃（縄文時代）からそこで人と湖が織りなす暮らし、それによって維持されてきた自然景観が存在してきた。人と生き物そして湖、湖辺、取り囲む平地と山地のエコシステムが形作られてきたのである。

私たち人間は自然から離れて生きることはできない。それゆえ、自然とどのように付き合っていくのかを常に考えていかなければならないが、琵琶湖における人のかかわり方、そして琵琶湖の富栄養化問題が発生して以降の人々の多様な取り組みは、自然と共生する社会へ転換していかなければならない現在の私たちにとって、多くの示唆を与えてくれる。本書をガイドブックとして是非とも琵琶湖を訪れてもらいたい。

ブルーカムイ　アイヌ民族の聖地へ！

著者：奥田進一（拓殖大学政経学部教授）

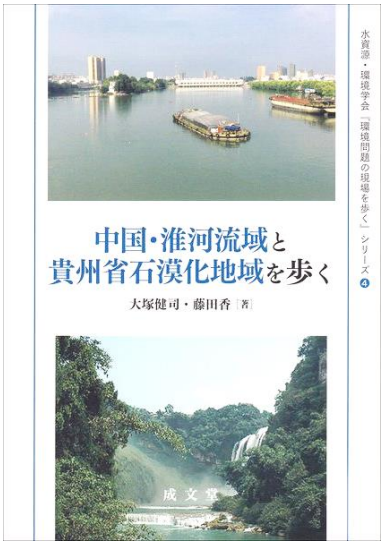
私は、民法と環境法を専門にしています。学部のゼミでは、有名な判例を素材にして学生たちの関心に絞って報告をさせています。夏のゼミ合宿は、報告でとりあげた判例の舞台となった現場に可能な限り足を運ぶようにしています。同様のことを実践している法学研究者は意外と多いようで、ある意味での「聖地巡礼」が行われているのです。二風谷ダムも、その「聖地」のひとつです。

二風谷ダム訴訟事件は、1997年3月27日に札幌地方裁判所において判決が下されました。この判決は、つぎの2点で画期的な判決でした。まず、二風谷ダムの治水機能の効果について大きな疑問を呈し、ダム建設のための土地収用裁決を違法であると断じた点です。つぎに、アイヌ民族の先住性を、国家機関たる裁判所が初めて認めた点です。

ダムに一定の治水効果があることは認めるものの、常に必ずその効果があがるとはいえません。判決はこの点を鋭く指摘し、ダム建設によって得られる利益よりも、失われる利益の方が大きいという判断をしました。実際に、二風谷ダムに足を運んでみると、判決の指摘がいかに当を得ているかを知ることができます。ところで、二風谷ダムが建設された沙流川およびそのやや北東を流れる鵡川の河口域は、シシャモの好漁場となっています。じつは、私たちがスーパーなどで購入しているのはカラフトシシャモという代用魚で、本当のシシャモは主に両河川の河口域でわずかな期間を限って獲られる貴重な魚です。しかし、近年、シシャモの漁獲量は急激に減少しています。シシャモは河口域の堆積砂を産卵場としており、その減少がダムと無関係であるとは言い切れません。ダム建設の影響は、いまなお継続しているといっても過言ではありません。

二風谷ダムの建設は、アイヌ民族の精神文化の一部を永遠に消滅させました。アイヌ民族は文字を持たない民族ゆえに、彼らの精神世界はもちろん、風俗習慣の詳細は伝統儀式等で披露され口伝の民謡等に拠るしかありません。その伝統儀式等が消滅すれば、彼らの歴史や習俗も消滅してしまうのです。判決は、この問題についても深く抉り、アイヌ文化はアイヌだけでなく、いわゆる和人にとっても多様な文化に触れ、単一的な価値観に陥ることを防ぐためにも重要な存在であると語ります。二風谷ダムの周辺に点在するアイヌ民族関係の資料館を経巡ると、この土地が和人の文化圏とは大きく異なることを実感できます。他方で、二風谷には、源義経はじつは頼朝の追捕を逃れて蝦夷地でアイヌの長になったという伝説が残っています。イギリス人旅行家のイザベラ＝バードは明治時代初期にこの地を訪れ、この伝説にかすかな疑問を抱いています。

本稿は，筆者がゼミナールの学生とともに2023年夏に訪れた「聖地」のひとつである二風谷の風景をもとに、アイヌの歴史や文化に思いを寄せながら書き下ろしました。本書を片手に、日本に居住する先住民族の魂の叫びを聞き取ってください。



ブックレット④

「中国・淮河流域と貴州省石漠化地域を歩く」

1,000円(+税)

ISBN:978-4-7923-3441-3

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

水汚染から村を救う！？

著者：大塚健司（アジア経済研究所）

わたしが中国の環境問題研究を始めた頃、現地では大気汚染や水汚染など環境汚染が深刻化しつつありました。環境汚染の現場に行くことはなかなかできないでいたところ、北京での在外研究の際に、テレビで環境汚染の現場をしばしば目にするようになりました。それには環境汚染の拡大に危機感をおぼえた政府が、これまで内々に情報を集めて対策を講じてきた姿勢を転換して、報道機関を通した環境保護キャンペーンを始めたことが背景にありました。また政府の環境保護重視の姿勢に呼応するかたちで、環境NGOの活動家や、NGOに協力したり自らNGOを立ち上げて活動をしたりする研究者があらわれ、そうした活動家や研究者と交流するなかで少しずつ現場の様子を知ることができました。

北京での在外研究を終えて帰国したあとも中国の研究者やNGOとの交流が続きましたが、その時に、淮河（わいが）流域の水汚染問題に取り組むNGOのことをはじめて知りました。現場の状況を知りたいと考えたわたしは電子メールでコンタクトをとって現地を訪れたのが2004年のことでした。そこで中国でテレビのドキュメンタリー番組でも報道された「癌の村」といわれる地域に足を踏み入れたとき、被害の惨状に足をすくむ思いをしたことを今でもよく覚えています。

本章はそうして始まった現地でのNGOとの交流や協働を含めたフィールドワークを描いたものです。わたしが現地でぶつかった困難や現地ＮＧＯが現状を打開しようと粘り強く行ってきた活動などについて時間を追って書き留めることで、読者のみなさんと共に淮河流域の水環境問題の現場を「歩く」ように追体験をしていただければと思っています。

また本章は中国の環境汚染問題の現場での経験を書いたものですが、その現場での交流を通して、水俣病をはじめ日本の公害問題の現場のことを改めて学び直しする機会にもなりました。昨今の中国、日中関係、そして世界をとりまく厳しい情勢に鑑みると、日本から中国に出かけて環境汚染の現場を歩くことは難しくなってしまいましたが、環境問題の解決に向けた人びとのさまざまな取り組みが、国境を越えて今後とも続いていくことを願ってやみません。

「石漠化」についてご存じですか

著者：藤田香（近畿大学総合社会学部教授）

本章では、中国・貴州省石漠化地域における人びとのくらしと貧困の克服、環境の再生にむけたとりくみについてふれています。日本ではあまり馴染みのない「石漠化」ですが、これはカルスト地形を土台として、その上の浅い表土に樹木が生えているような土地で、表土と樹木が失われ、石灰岩が露出する現象です。

調査時、貴州省は中国のなかで経済的に最も貧しい省でしたが、貴州省の自然は豊かで、春の調査では美しい棚田と菜の花畑の景色を一面にみることができました。

当時の中国は、沿海部の経済発展に取り残された内陸部における開発、貧困、環境問題が社会問題として取り上げられ、これらへの対策が国内外のさまざまな主体によって実施されようとしていました。貴州省のフィールド調査では、並行して、北京や上海といった都市部での調査も実施していましたので、わたしは沿海部では水がボトルやタンクで配達され、容易に入手できる一方で、内陸部では水の確保が難しく、小学生の子どもまでもが帰宅後に何時間もかけて、水桶を天秤棒でかついで水汲みにいく現状とのギャップに驚き、まるで異なる時代を行き来しているような感覚をもちながら、調査をすすめていました。同時に、このようなギャップは、中国の沿海部と内陸部にとどまらず、貴州省のなかでも、省都である貴陽と貴陽から離れた畢節でもみることができました。

地域の自然環境の悪化と貧困の連鎖の解決への道のりは長くけわしいものですが、解決に向けて実証研究を積み重ね、その答えを見出すためには現場にふれることが大切です。現場だからこそ、どのように厳しい状況のなかでも、希望をもってとりくむ人びとにふれたり、どのような厳しい状況にあってもしたたかにいきる人びとと出会ったりすることができました。中国のなかで経済発展が相対的に立ち遅れて、地域内でも格差がいちじるしい地域において、環境に配慮した持続可能な発展をすすめていくにはどうすればよいか、その答えはいまだにみつかっていません。中国のフィールドでの経験は、貧困問題と環境問題が互いに絡みあい、事態をいっそう悪化させていくといった点で、古くて新しい課題に向きあうことであると同時に、わたしたちが経験してきた公害問題などの身近な社会課題と多くの共通点があります。

経験することは学ぶこと、かかわることで世界はひろがります。これからも現場に向きあい、現場にふれることで課題解決に一歩でも近づく研究がすすめられることを願っています。

ブックレット⑤「京都・鴨川と別子銅山を歩く」

1,000円(+税)
ISBN:978-4-7923-3442-0

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

鴨川（三条大橋から五条大橋間）の河川沿いは物語の宝庫

著者：
鈴木康久（京都産業大学現代社会学部教授）
大滝裕一（㈱東京建設コンサルタント関西本社京都事務所専任技師長）

千年の都・京都の中心を流れる「鴨川」。テレビニュースで台風情報を伝える場所は四条大橋です。京都の風物詩で知られる鴨川納涼床で、舞妓さんとお酒を楽しむ様子は夏の定番となっています。このように多くの方々が知る「鴨川」ですが、四条大橋は何の時代から架かっているのか。鴨川納涼床が何時から始まったかを御存知の方は少ないのではないでしょうか。

そこで鴨川に関係する水文化を知っていただければ、「鴨川が歴史の舞台としての輝きを放つのでは」と、取り組んだのが本著です。これまでも鴨川に関する書籍は多くあり、それぞれのテーマに応じて知識を与えてくれます。これらの書籍を一冊に凝縮してみようとの思いで、東海道の西起点である「三条大橋」、平安時代に架橋された「四条大橋」「五条大橋」の歴史について文献等を参考に年表にしてみました。鴨川沿いを歩くと目にする石碑やモニュメント（82基）についても、設置者、設置年を記載した一覧表を作成しました。

本著を書き上げる中で、豊臣秀吉や昭和10年の鴨川洪水などの物語を持つ「五条大橋」が擬宝珠の博物館であること、鴨川沿い石碑やモニュメントの約半数を市民が設置するなど地域住民に親しまれている実態が明らかになったことは、筆者にとっても新たな発見でした。本著では、鴨川を語るときに知って欲しい、角倉了以の「高瀬川」、物流拠点を護る「寛文新堤」、都の復興を担った「琵琶湖疏水（鴨川運河）」などの解説もしています。本書を携えて歩くことで、鴨川が京都の都を育んできた歴史を知っていただき、さらに鴨川への興味を持っていただけることを願っています。

銅山を巡る壮大なドラマ

著者：高橋卓也（滋賀県立大学環境科学部教授）

田中正造で有名な足尾銅山と同様、別子銅山では、明治、大正、昭和と煙害等の公害問題が発生しました。近代日本における環境問題の初期の事例です。

別子銅山については研究者、ジャーナリストのほかにも別子銅山から生まれた住友グループ、地元新居浜市の関係者、さらには鉱山ファンなど多くの方々が熱のこもった本や記事を書いておられ、何を本書の特色とするか悩みました。

そこで、文理融合の別子の物語を目指し、恐竜の時代にさかのぼる地球史的な地質の話題、鉱山の燃料利用による森林資源への影響、近世のアジア経済への貢献、ともに名経営者であり叔父と甥でもある広瀬宰平と伊庭貞剛の対立、地域社会と企業のぎりぎりの交渉過程についての話題をちりばめました。江戸～昭和の別子の絵図、写真も掲載しております。別子の地中に広がる銅鉱床の３次元での表現、亜硫酸ガス拡散の可視化にも挑戦しました。別子を巡る詩歌（漢詩、狂歌、短歌、俳句）もいくつか引用しております。億年単位での大地と海洋の変動の偶然、そこに発生した人々と自然との間の３世紀にわたる壮大なドラマを少しでも生々しく伝えたかったのです。

「なぜ、京都・鴨川とのカップリング？」と疑問に思われるかもしれません。詳しくは、本章を読んでいただけばと思いますが、住友発祥の地は京都にあり、江戸期の京都の繁栄は長崎からの銅の海外輸出を通じて別子につながっているということでご納得いただければと考えております。

表紙の下の写真は、旧・別子銅山の東平（とうなる）地区（「東洋のマチュピチュ」）にある第三通洞―別子の山を南北に貫くトンネル―の入り口です。現在観光客は中に入ることができませんが、この奥にかつて潜んでいた銅鉱石に人生を賭けた、あるいは人生を左右された人々を思いつつお読みいただければありがたいです。次にあげるのは、本章には盛り込めませんでしたが住友に勤めていた歌人・川田順の短歌です。

地中にて 働くことは 慣れながら 皆大山祇（おおやまづみ）に 禮（いや）して這入（はいい）る

※大山祇（おおやまづみ）とは、山の神様。鉱山労働者が地下に入る前に、その神様のほこらに一礼する様子を描く。

地下の危険な労働が日常でありつつも、「山」への畏敬の念を持って安全を祈り働く鉱山労働者が思い浮かぶ。

ブックレット⑥「石垣島白保集落と霞ケ浦を歩く」

1,000円(+税)
ISBN:978-4-7923-3444-4

お求めは最寄りの書店に
ご注文いただくか、
ネットショップへどうぞ！

※右のQRコードを読み
取って頂くと、主要なネット
ショップの一覧が出ます。

好評発売中！

白保・魚湧く海に生かされて

著者：三輪信哉（大阪学院大学国際学部教授）

私は20代前半、学生だったころ沖縄の八重山諸島で、環境と人との関わりを知ることを目的として、八重山諸島を調査していました。特に自然環境と調和した生活や集落のありかたを人口1600人程の白保集落で調査。集落の人々が気軽に話を聞かせて下さいました。そうした学生時代のフィールドワークが一段落したころ、今から45年前の1979年、突如として白保集落の地先のサンゴ礁に新空港が建設される話が持ち上がりました。その後、私自身は直接空港建設問題に関わることはありませんでしたが、八重山諸島での調査を継続してきました。

石垣島南部の内陸部の旧空港は滑走路も短く大型機の離発着が困難で、八重山諸島全体の経済発展のためにはどうしても新空港が必要だと諸島全体から渇望され、白保集落地先が選定されたのでした。そこから約30年、空港建設を巡って島の中でも、集落の中でも、そして家族の中でも建設賛成・反対の意見対立が続くという、苦渋の時が重ねられました。

白保の海は、集落の人々と日常的に関わり、食料や建築資材など多くの生態系サービスを提供してきました。意識せずとも続けられてきたサンゴ礁との関わりも、建設問題とともに明確に認識され、そこから持続可能な生態系と集落のありかたが模索され始めました。とりわけ、2000年にサンゴ礁保護研究センター「しらほサンゴ村」が出来て以降、同センターが科学的な知見を提供するとともに、持続可能な集落を目指して、サンゴ礁と集落とが一体となった順応的な生態系管理を集落の人々の力で作り上げてきました。

人々は、集落は自然とどのように関わってきたのか、外部からの研究者がどのように持続可能な社会づくりに関われるのか、30年の歴史はそうしたことを教えてくれる持続可能な地域づくりのプロトタイプともいえるでしょう。まずは、現地に足を運び、人と環境とのかかわりを五感で感じて頂きたいと思います。

霞ケ浦。湖岸の景観から、人と自然のかかわりを読み解く

著者：淺野敏久（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）

霞ケ浦は、関東平野の東部に位置する面積220㎢、日本で２番目に大きな湖です。湖岸の長さは約252㎞で、日本最大の湖である琵琶湖よりも長いです。私が初めて霞ケ浦に訪れたのは、約40年前、大学４年生の時でした。当時は、湖の富栄養化が社会問題化していて、住民らが「霞ケ浦をよくする市民連絡会議」を組織し、「市民の手による水質調査」を始めた頃です。特にアオコの発生状態を把握しようと調査をしており、それに同行して各所を見て回りました。湖から目を転ずると、山といえば、遠くに見える筑波山くらいで、平らな景観が広がっています。現在、私は盆地に住んでいて、どちらを見ても山があることからすると、違和感を覚える利根川下流域の景観です。

霞ケ浦では富栄養化が問題になる以前から、現在に至るまで、人々と環境の関わりにおいて、さまざまな問題が生まれてきました。洪水、海水の逆流による塩害、それに備えるための常陸川水門の建設、その水門を要として進められた霞ケ浦の水資源開発、高浜入の大規模干拓計画、流域内での鹿島や筑波の大規模開発。そして水門の閉鎖は「1973年の異変」を引き起こしました。シジミの大量死、養殖コイの斃死、大量のアオコの発生、緑色の水道水や湖からの悪臭など、さまざまな事件が噴出しました。そして、富栄養化問題が焦点化されていきます。その後、霞ケ浦導水事業の是非が問われる一方、湖や流域の自然再生や親水空間の創造がテーマになりました。生物多様性への関心が高まり、外来種への対応、水産資源の回復、湖岸の植生復元、流域の里山保全や自然再生、湖と結びつく循環的な地域産業の構築など、霞ケ浦をとらえる視点は多岐にわたっています。

これらさまざまな問題は、現在の霞ケ浦の景観の中に織り込まれています。本稿では、霞ケ浦の湖岸のごく一部を自転車で走りながら、これらの景観を読み解いていきます。本書を手に現地を歩き、なにげない湖の景観から、これまでの出来事を思い起こし、人と湖の関わり方について考えていただければ幸いです。